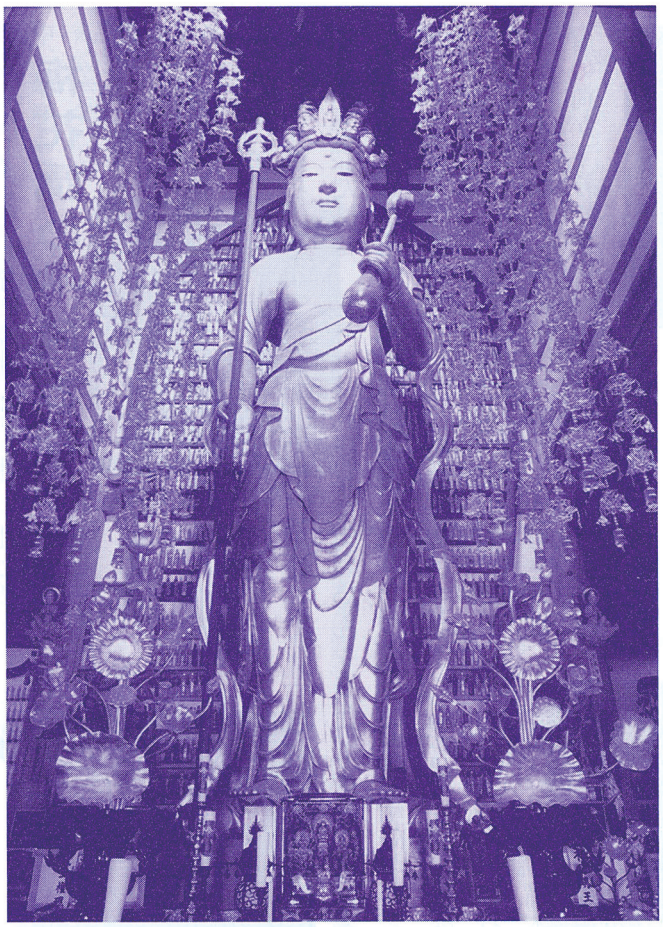
同行

平成22年2月15日
第32号
発行　梅花流師範・詠範の会
会長 岩舘祖芳
題字　初代会長・故加藤信三師
編集者（広報部）亀谷隆道
梅花流師範・詠範の会事務局
大仙市協和　太寧寺　伊藤道人
電話（0188-96-2029）

お慈悲の眼（まなこ）あたたかく
まどかに知恵は満ちわたる

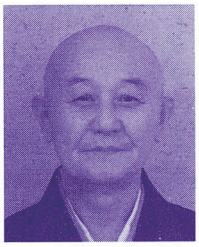


由利本荘市 長谷寺の十一面観世音菩薩像

この世の母のおん姿（すがた）
南無や大悲の観世音

〝梅花〟すばらしい世界

秋田県梅花流師範・詠範の会 会長 岩舘祖芳



あなた様に、新年のご挨拶をいたします。（では合掌し、元気な声で申します。）

私「明けまして、おめでとうございます。」

あなた『**おめでとう**。』

おやっ？声に力がありませんネ、口ごもってますョ。おなかに力をいれて、もう一度お願いします。「ハイ。」

あなた『**おめでとう**。』ありがとうございます。その元気、明るさが大事です。そして、その「元気の源、生きる力」を教えてくれるのが〝梅花〟です。「梅花やってますかー。」聞くまでもないことですが、念のため「ハイ、元気な声で。」

あなた『・・・・・ー。』おやっ？やってらっしゃらない方もいますが、「どうして？」『んだて、ムズガシモノ…。』〝梅花が難しい〟とは、よく聞きます。「ナニが難しいんですか。」とお尋ねすると、ほとんどの方が、『センヨウ（ツヤ、アヤ、他）」とおっしゃる。実は、私もそうです。でも、センヨウが最初にあって、ご和讃、ご詠歌が出来たのではありません。もちろん、「センヨウ」は大事なもの、否定するつもりはありません。ですから、それに向かう心は大切ですし、出来た時の喜びは格別です。でも、そのために、〝生涯の友、一生の支え〟と親しんだ梅花を考える時、あまりに残念としか思えません。

悲しい曲、楽しい曲、明るい曲、重厚な曲。心を揺さぶる歌詞、思い溢れるメロディ、遠く近く澄み渡る鈴鉦の響きなど、そのままが佛の世界、教えの活動です。『梅花を学んで良かった』と、たくさんの方がおっしゃいます。中には、梅花服、ワゲサを身にし、合掌で教典を持ち、最後を迎えられた方がおられる程です。梅花から安心を得られたものでしょう。梅花が大きな支えだったのでしょう。こんなスバラシイ世界が他にあるでしょうか。お唱え下さい。又、ぜひぜひ、お友達をお誘い下さい。男女を問いません。老若男女どなた様も。

正月は〝修正の月〟の略とか。過去を振り返り、過ちは反省し、やれなかったことは、実行しようということでしょう。『私？』黙秘権…。いえ日々これ修正でーす。

さて今年は、五年に一度の全県大会です。たくさんのご参加を、そして、新講員さん方のご来場を心からお待ち申し上げます。

末尾となり、真に失礼とは存じますが、県内梅花講ご寺院様、ご寺族様、又、各ご寺院様、師範・詠範の皆々様、日頃のご教導心より御礼申し上げますと共にこの一年、倍旧のご教導をお願い申し上げ、年頭のご挨拶とさせて頂きます。

梅花のつどい　県北地区梅花一泊研修会開催

～藤里町　宝昌寺～

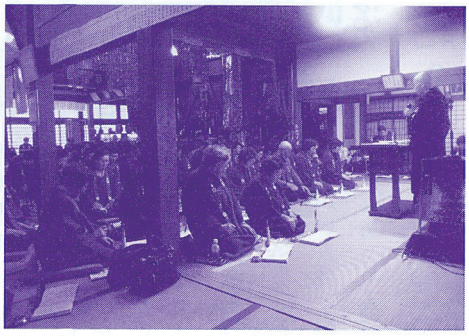
梅花講の一員となって

長慶寺梅花講　深川　美恵子

車窓から藤里の紅葉を眺めながら、梅花講員一泊研修会に向かった。宝昌寺に着いて間もなくして、要項が配布された。その中に、且つて私と出会った頃は、クリクリッとして実にめんこい少年であった亀谷隆道師範のお名前を見つけた。そぞろ浮き立った私は、直接受講ができないようだから、挨拶だけでもと機会を待った。幸い宴会でお会いする事ができて、大げさだが肩の荷が下りた思いがした。というような御縁があったからか、この原稿依頼があった。大変な事だと思ったが、これも亡夫の供養になるのではと、思い直して受けることにした。

万灯ともして亡き人を思う

さて、開講式・全体講習では大勢の講員。私には、皆さんが大ベテランに見えた。月に三回の練習に出れない日もあり、出たとしても、全て先輩の真似をしながら、歌詞・音符・音声を追い掛けている程度の私、初心者コースへは、自分の上達を期待して臨んだ。



位牌堂が私達の会場だった。「寒くありませんか。足を楽にしていいですよ。」と、講習の合間に温かいお言葉を掛けて頂いた。慈悲の心を感じた。実際の講習では、詠題・詠頭と唱え方との関係、膝打ちの手の位置・拍の取り方、音符の見方、撞木頭の持ち方・振り方・位置など、プリントも用意され、板書したり、唱え聞かせたりを何回も繰り返し、時にはジョークも交えて、楽しく御指導して下さった。又、立行作法、梅花流の起源や四摂法御和讃の意味、更には全体講習での報謝御和讃の意味など教えて頂き、普段習っていることの確認と共に新しく知る事も多かった。

詠讃歌に、このように深い意味があることを知り、練習時に「歌詞を味わいながらとなえるように。」と言われている大切が分かった。

一日目に行われた萬燈会供養のあの光景は今も静かに見えて来る。厳かな雰囲気の中で優しく揺らぐ蝋燭の明かりと静止した人影は幻想的で、そこへ流れて来る詠讃歌の響きに、私は雑念を洗い流されたかのように、静かに安らいで行くのを覚えた。この供養にどのような意味があるのかは分からないが、佛様もさぞかし、安らぎを感じておられるだろうと思った。

帰宅して顧みるに、研修会に参加して、得る事の多かったことに感謝し、又、参加しようと思った。

県北奉詠大会開催報告

～大館市文化会館～

今大会の一番の注目は梅花流の元祖ともいえる「密厳流」の登壇奉詠であった。

真言宗智山派密厳流遍照講の皆さんによる御詠歌の音曲はまさしく同じものであり、梅花流の源流がそこにありました。

興教大師の御詠歌奉詠

詠題師の普傳寺様が横で詠題を挙げてお唱えする御詠歌は力強く堂々として、あたかも巡礼歌のように響き渡りました。

密厳流については、また次号で御紹介したいと思います。

梅花のつどい 県南・中央地区梅花一泊講習会開催

南秋本荘市 長谷寺

一泊講習に参加して

清源寺梅花講 高橋恵子

見上げる程の杉の木立に囲まれて、整然とした長谷寺様。左方に赤田の大仏さんと知られる大仏殿。由緒あるお寺とお聞きしておりました長谷寺様での一泊講習に参加させて頂きました。

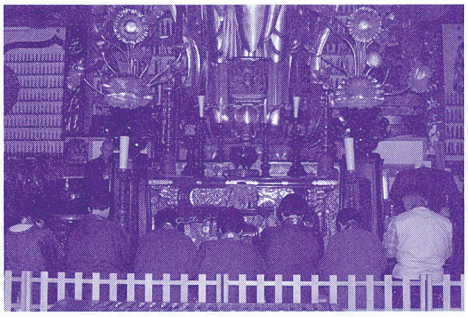
遠い所…と思っておりましたが、以外と早く到着し、方丈様の浅田先生、寺族様の優しい笑顔に迎えられ、お寺内を拝観させて頂きましたが、お部屋数の多いのに驚きました。

特派講師の久嵜先生には、本山講習永平寺でお世話になりました。楽しい先生で、変わらぬ大笑いのご指導に、皆さん泣き笑いの中、時間も足りない感じでした。笑いの中から大事なことを知る楽しさ、再度機会に恵まれまして、とても幸せに感じました。

大仏殿にて講習

夜の万灯供養、ロウソクの灯りだけの静寂に流れるお経独詠〝無〟の世界でした。

テレビで初めて知った大仏殿は、十九メートル余りの丸太の四本柱、格天井には本荘藩のお抱え絵師による画、十一面観音様、それぞれに表情がお有りとのことですが、あまりにも高いもので、はっきり拝顔は出来ませんでしたが、大慈悲の観音様のお膝元で御詠歌を奉詠させて頂き、感激でございました。



観音様の御前にて奉詠

久嵜先生、諸先生方の細かいご配慮には恐縮でございました。ご接待頂きました皆様には、心のこもった手作りのお食事、とても美味しく頂きました。沢山の皆様にお世話になり乍ら、充実した一泊二日でした。有り難うございました。

帰りは運転手さんのご好意で、千体地蔵さんのお参りもさせて頂きました。

合掌

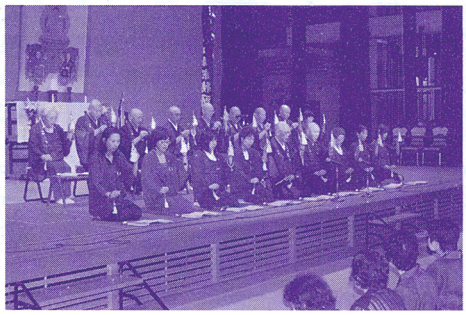
県南・中央地区奉詠大会

長谷寺 寺族 浅田依子

今年の梅花流秋田県奉詠大会（中央・県南地区）は八月二十八日に西目公民館「シーガル」にて行われました。

私たち梅花講は穏やかな朝少し早くバスに乗り会場へと向かいました。すると次から次へとバスが到着し、見覚えのあるお顔の方々が降りてきて、みなさんは再会した喜びを分かち合って会場へと入って行かれました。本当にみなさん梅花を楽しんでいるのだなと感じた一瞬でした。

今回の登壇奉詠は高祖様と太祖様の同じ曲両方をお唱えするといったおもしろい試みだったと思います。他の講員さんが自分と同じ曲をお唱えするのですから、皆さんお互いに興味を持って聞かれているようでした。また、知り合いの方が出るので皆さん真剣にそして優しい気持ちで聞かれているせいか、会場の中は始終和やかな雰囲気で進行していきました。



師範詠範の模範奉詠

また、柴田先生の講習を奉詠大会の場で聞くことが出来たことも、皆さんにとってはとてもありがたく、とても良かったという声が聞こえてきました。

登壇奉詠が終了し、次は去年に続き露の新治師匠の講演が行われました。師匠が搭乗する予定の飛行機が飛ばないというアクシデントもあり、時間は多少遅くなりましたが、今年も命の大切さ時間の大切さを感じる元気を貰って講演を聞くことが出来ました。これからも、御指導を頂きながらみなさんといっしょに御詠歌を続けていきたいと改めて思った一日でした。

笑顔でリラックスした会場

梅花のふるさと

観音さまと太祖さま

円通院縁起 ―一

～詠讃歌の生まれた風景（その十 太祖常済大師瑩山禅師誕生御和讃）～

太祖常済大師瑩山禅師誕生御和讃

此の世の人を救うべき
良き子をわれに授けよと
真心こめて母ぎみは
観音菩薩にいのらるる

作詞　堀口義一

【洞谷山栄光寺の秘仏十一面観世音】
像高約五センチ

◇十一面観音との出逢い◇

石川県の永光寺は、太祖瑩山禅師によって開かれた由緒の古いお寺です。ここに、大きさ一寸八分（約５センチ）の十一面観音像が、秘仏として伝えられています。この観音様にまつわるお話を今号から二回に分けていたしましょう。

太祖様が、ご自分の生い立ちや永光寺開創のてんまつなどを記した『洞谷記』という記録があります。洞谷とは永光寺の山号洞谷山にちなむものです。かつて永光寺のそばに円通院というお堂がありました。ここに紹介するお話は『洞谷記』の中の、円通院の由来を語るところ、一般に「円通院縁起」として伝えられている物語です。

元亨二年（一三二二）六月十八日、私（太祖瑩山）は円通院を建てました。ここのご本尊は、私の母上が一生の間肌身離さず大切に頂戴していた十一面観音であります。

それは母上が十八歳の時のことでした。母上の母君（私の祖母）と生き別れとなり、七、八年もの間行方知れずとなっていたことがありました。心配した母上は祖母との再会を願い、京都清水寺の観音様へ七日間の願かけ詣りに出かけました。毎日通い続けて六日目のことです。お詣りの途中、道ばたに小さな丸いものが落ちていました。拾い上げてみると、それは十一面観音の頭の部分でした。驚いた母上はこれもきっと何かのご縁と思い、その観音様にこう誓いました。

「母君ともう一度会いたいと願い、清水寺へ通い続けるこの路で観音様をいただきました。これはきっと私の悲願がかなうしるしに違いありません。どうぞ観音様のお慈悲の力で、もう一度母君と会わせて下さい。もし願いをかなえて下さいましたなら、その時は私、観音様のお身体の部分をお造りし、一生ご本尊様として大切にいたします」と。

するとその翌日、七日目のお詣りの途次に、祖母の使いだという女性と出会い、居所を尋ね、ついに再会を果たすことができたのです。母上は観音様の霊験あらたかなることを身をもって体験しました。そして誓いの通り、仏師に観音像のお身体を造らせ、自分が持っていた頭の部分と合せて、一生頂戴のご本尊としたのです。

清水寺は十一面観音をご本尊とするお寺です。太祖様のお母様にとって、その参道で得た頭だけの観音様は、清水寺のご本尊のお使いとも受けとめられたのではないでしょうか。これ以後、お誓い通り、お母様は生涯その十一面観音に信仰を捧げました。

◇太祖様お誕生◇

一体の仏像として形の成った十一面観音は、その後、太祖様とそのお母様お二人のご生涯をずっとお守りして下さることになります。太祖様お誕生の時にはこんなことがありました。

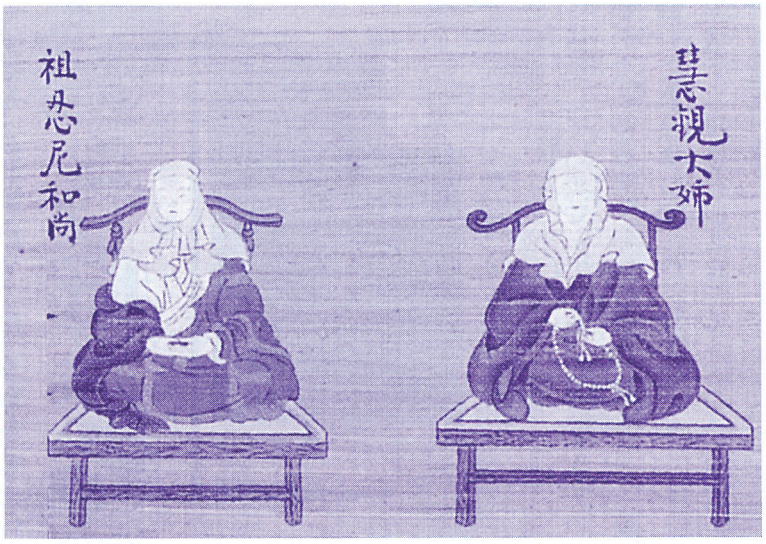
母上は三十七歳のある日、暖かな朝の陽射しをのみ込む夢を見ました。目覚めてみるとお腹に新しい命が宿っていることがわかったのです。そこで母上はご本尊・十一面観音にこう誓いました。「私のお腹の子が、成長して世の人々を導くような聖人となりますなら、どうぞ無事に生まれさせて下さい。けれどももしそうでないとすれば、観音様のお力で、私のお腹にいるうちになきものとして下さい」と。そして毎日三千三百三十三回の礼拝をし、『観音経』の読誦を続けたのです。

こうして産まれたのが私でした。母上が産所へ行く途中で生まれましたので「行生」と名づけられました。

そういうわけで母上は、私が生まれてからも私の出家、学問、修行、さらには私が弟子に法を伝える時、お寺の住職となる時、人々に教えを垂れる時など、ことあるごとにこの十一面観音に祈念してまいりました。

太祖様が、まだご自分の生まれる以前のことや生まれて間もない頃のことをこのように記録できたのも、幼い頃から、折に触れてお母様がお話しして下さってきたからでしょう。太祖様は、つねに観音様への感謝を語るお母様のことばを聴き、またひたむきに観音様を伏し拝むお母様の姿を見て成長してこられたのです。

【母・慧観大姉と円通院始祖・祖忍尼】



右が母・慧観大姉、左は円通院の始祖・祖忍尼和尚。祖忍尼は、もと永光寺の土地を寄進した在俗の女性。太祖について出家し、尼僧となった。

◇円通院開創◇

太祖様五十一歳の時、お母様は八十七歳でお亡くなりになりました。亡くなる間際にお母様は、終生大切にしてきた十一面観音像を、太祖様にお預けになりました。

この十一面観音をご本尊として建てられたのが円通院だったのです。ご本尊とするにあたって太祖さまは、お母様が十一面観音と同じように生涯懐にしていた、太祖様の生まれた時の髪の一房とへその緒を、観音像の台座に納めて、永光寺鎮護のご本尊としました。そして円通院を建立した功徳は、お祖母様の菩提供養のために回向することにしたのです。お祖母様は明智優婆夷、お母様は慧観大姉とそれぞれ仏弟子としてのお名前をいただいています。

太祖様のご生涯はお母様と観音様によって育まれたということが出来るかもしれません。『観世音菩薩御和讃』に「この世の母のおん姿、南無や大悲の観世音」という一節があります。太祖様にとって、お母様こそが十一面観音であり、お母様亡き後は十一面観音こそがお母様であったのではないでしょうか。

※掲載した図版は『永光寺史料調査報告書』（石川県羽咋市教育委員会）所載のものを利用しました。

【太祖瑩山禅師肖像画】

みんな！梅花やってみネイガー

おらほの梅花講

萬松山（ばんしょうさん）霊仙院（れいせんいん）

住所　湯沢市松岡
設立　平成十三年
講長　嶋森　裕憲
講員　七人

霊仙院梅花講は平成十三年に設立いたしました。まだ設立十年にも満たない新米な梅花講です。自身の研鑽を先にということで、講中としてはしばらく活動していませんでした。私は県南での師範詠範の会「澄聲会」参加させていただき、梅花を研鑽しておりました。

平成十六年に晋山式を行ったおり、儀式のなかで御詠歌をお唱えして行えばよかったと思い大変後悔をいたしました。

そういったことがあり、その翌年に講員を再度募集して、お寺に於いて月二回の練習会を始めました。なにごとも初めてで戸惑いながらの練習会でしたが、「講員の皆さんと一緒に楽しくお唱えをする」という想いで一心にやってまいりました。練習が終わってからの茶話会も楽しいです。講員の皆さんは毎年の奉詠大会、特派梅花、一泊講習会を毎回楽しみにしています。

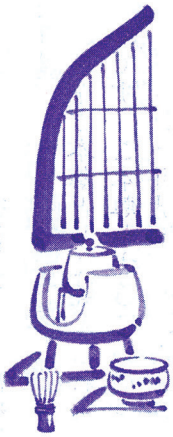
お寺の年中行事には、梅花講の皆さんと一緒に供養しています。現在七名の講員がおりますが、そのうち男性が三名です。混声のお唱えはいいなぁと感じています。

実は横手・湯沢の県南地域では梅花があまり知られておりません。ご法事でお唱えすれば驚く方が沢山おります。習慣があまりない地域での梅花講ですので、講員はなかなか増えませんが、当院梅花講の熱が広く伝わってほしいと思っております。

これからも講員の皆さんと一緒に学ぶ気持ちを忘れずに研鑽していきたいと思っております。

紹介者　講長　嶋森　裕憲

右端が鈴木さん～ 奉詠大会にて



～寄稿文～

「梅花を始めて」

霊仙院梅花講　鈴木サツ子

人生は筋書きのないドラマであるとある人が言いました。私のようなものはその言葉に当てはまるのではないでしょうか。

長男が亡くなり七回忌を迎えます。一日も思い出さない日はありません。自分の病気もあり大変な思いをしております。亡くなった頃は泣いてばかり。あんなに元気であった長男が私達の前から突然いなくなるなんて、今でも信じられません。ふと声がして探すこともありました。

孫たちに救われ、大勢の方々に支えて頂き今では元気になれました。感謝するばかりです。

長男の供養になればと思い始めたお寺さんでの梅花講、そのお唱えは何とも言えない心が満たされ癒されるものでした。ある時は涙まじりの勉強会になることもあります。お寺さんに通うようになって少しずつ元気になれました。行動範囲が広くなりたくさんの人との出会いを頂きました。生きていることがありがたくお寺さんに感謝です。

梅花講の勉強会は毎月二回二時間ぐらいです。勉強会が終われば住職、奥さん、皆でお茶っこを飲みながら四方山話に花を咲かせます。（楽しいですよ）。私は残された人生、長男が残してくれた孫を育てる手助けをして「ばあちゃん、ありがとう」と言ってもらえるよう、病を友にがんばっていきたいと思います。

邦楽への誘い開催

邦楽コンサートに参加して

倫勝寺副住職　山田俊哉

昨年九月、県主催の邦楽コンサートに、烏合衆の皆さんと共に青年宗侶有志の一員として参加するお話を頂きました。自性院様プロデュースによる、尺八やお箏とご詠歌、声明の融合したコンサートです。梅花師範の籍があるとはいえ駆け出しの私にとって舞台に上がってお唱えするという事はあまりに無謀だと思いましたが、諸老師諸先輩に囲まれているので大丈夫だろうやってみようかということで参加させていただきました。

烏合衆の皆さんは一流の師範老師が勢揃いしているにも関わらず、またこういったコンサートをすでに何回も経験しているにもかかわらず、お忙しい中を天王の長沼禅苑にて何度も何度も練習しました。私たち青年宗侶の為であったことは理解しておりますが、一つの〝舞台〟に臨む姿勢というものを教えていただきました。私たちの担当のプログラムは、達磨大師のご和讃とご詠歌と尺八、お箏の合奏曲である「達磨大師影讃曲」と、声明・和讃のメドレーです。多人数のご詠歌の重厚さと和楽器との合奏の響きに、練習の時から感動する思いでした。影讃曲はいわゆる梅花流の本来の姿とは違うものでありましょうが、このような形はご詠歌の主題もより解りやすく、聴き手の心に深く染み入るのではないでしょうか。

声明は如来唄や七仏宝号など私たちにはなじみ深いものですが、一つの〝ショー〟として見せる所に新しさとやりがいを感じました。

入念な練習を積み、あっという間に当日を迎え、緊張の中アトリオンで出番を待っておりますと、開場時間の前からロビーには沢山の人だかり、チケットも早々に完売し、会場は超満員となりました。県を代表する邦楽の先生方の演奏が終わり、声明の出番です。静寂に染み入る声明、鼓、銅鑼、ハツの音は聴く人に邦楽の源流を伝えてくれたようです。コンサートの最後が達磨大師影讃曲です。リハーサルで気にしていた板間に正座する痛みも忘れていました。一番の出来でした。演奏の最後の部分は、聴衆の拍手にかき消されてしまいました。そして誰も予想していなかったアンコール。ステージの上には心地よい達成感が漂っていました

後日聴かれた方から、涙が出たと感想を頂きました。達磨大師の崇高なお姿が皆さんの頭に浮かんだことでしょう。声明や詠讃のように音程を付けた経には、諸天を喜ばせ鬼神を解脱させる無量の功徳があるとされています。

邦楽とのハーモニーの中で、演ずる私たちも無我の中に居ることが出来た気がします。

梅花流にはまだ新たな可能性があると感じました。楽しみです。大変貴重な体験をさせていただきまして、有難うございました。

合掌

右端手前でハツを担当

鬼神解脱するや否や

師範詠範研修会

五城目町 天昌寺寺族　小沢兼子

九月二日、由利本荘市長谷寺様に於いて、宮崎県より久我経二、一級師範老師様をお招きして、師範詠範の会講習会が行われました。

講師様は特派師範や全国大会の司会なども務められており、経験豊富で講習内容も楽しく、私達生徒を飽きらせることなく講習に夢中にさせて下さいました。

自分で学びとる事と、講員さんに伝える役目もある私達には参考になる事が沢山ありました。

取捨選択する事、挫けず立ち上がる事、自分なりの目標（楽しみ）を持つ事が大事とご指導いただきました。

なかなか寺院を留守に出来ない私達にとってちょっと新しい風に吹かれる、良い機会でした今後も誘い合って参加したいと思います。

最後に、講習会を準備して下さいました事務局の皆様、また、諸行事が重なっていたにも拘わらず、会場を開放して下さいました長谷寺御山内の皆様に深く感謝申し上げます。

合掌

眼光鋭い講習の中にユーモアも

ちょっと ぶじょほう ～梅花つれづれ～

『梅花って、いいよね』
～南無の「な」とは～

能代市 玉鳳院副住職　柳川 一童

梅花流詠讃歌に足を踏み入れたきっかけ、それは平成十八年の初秋、「どんだ？やってみねが？」そんな師匠の一言でした。

当院にも梅花講があって、涅槃会等でお唱えをしたり、毎月練習しているのは知っていましたが、何をやっているのかはさっぱり分からず、頭の片隅にあったのは「チン、リンリン」という音だけ…。そんな状態で始めた梅花でしたが、縁あって梅花流師範養成所へ二年間通わせて頂き、基礎をみっちり教えて頂きました。とはいっても、お唱えは調子外れ、鈴は往復ビンタ、鉦は空振りする始末。まだまだ修行中の身、むしろ一生修行の身。いつになったら師匠を唸らせることができるのやら。

昨年の夏のこと。法事後、お斎の席である初老の男性に「和尚さんは、梅花やってるのかい？」と尋ねられました。私が「やってはいるが勉強中です」と答えると、その男性は「梅花っていいよな」と微笑まれました。男性が檀家になっているお寺では、お経の後に詠讃歌があるとのこと。また、「お経はありがたいとは思うが、何を言っているのか分からない。でも梅花は言葉も分かりやすいし、なによりあの旋律に心が和む。和尚さんもお務めのときに、是非梅花を取り入れてほしい」と仰った。まだ、どうして？何の為に？梅花をやっているのか何の見当もついていない私には「そうですね」と答えるのが、その時は精一杯でした。過日、ある先生の講習で、お経の最も尊い唱え方は音声の技巧をこらして詠ずること、つまり声明である（私の勝手な解釈かもしれません）とお教え頂いた。そういえば、予てよりウチの師匠には、「梅花＝声明だ」さらに「お務めは命懸けでやれ、絶対に手を抜いてはいけない」と教えられている。ということは、お釈迦様やお祖師様方の教え（お経）が説かれている梅花は、声明であり最も尊いお唱え、命懸けでやらねばならぬではないか！果たして自分はどうか？全くもってであります。旋遥法や歌詞の意味にばかり囚われて、そんなことは考えも及びませんでした。お唱えはテクニックや知識ばかりではなく心をこめて一所懸命に務めなければと気付かされたのでありました。

紫雲の「な」。私の「な」は本当に南無なのか？自問自答する日々ですが、初めての方にも「梅花っていいな」と感じてもらえるようなお唱えを目指して精進してまいります。

「なっ」わがったが？

日常の仏式行持も命懸け

テレホン梅花

☎〇一八―八七三―七六七六（ハナミ ナムナム）

（毎週土曜日にテープが代わります。）

▼三月六日　花供養（和）
十三日　供華
二十日　香華
二十七日　四摂法讃歌

▼四月三日　慶祝（和）
十日　誓願（和）
十七日　御授戒（和）
二十四日　観音（和）

▼五月一日　慈光
八日　浄光
十五日　報恩供養（和）
二十二日　澄心
二十九日　報謝（和）

▼六月五日　追善供養（和）
十二日　妙鐘
十九日　地蔵（和）
二十六日　慈念

▼七月三日　無常（和）
十日　月影
十七日　修証義（和）
二十四日　伝心
三十一日　正法（和）

※ご意見、ご要望等お気軽にお寄せ下さい。

〒〇一〇―〇一一一
秋田市金足岩瀬字前山三
東泉寺（〇一八―八七三―二六七五）